

東洋文庫

114

平凡社

義経記

1

佐藤謙三
小林弘邦 訳

さとうけんぞう

佐藤謙三 明治43年横浜生。国学院大学文学部国文学科卒（昭8）。国学院大学教授，文学部長。専攻 平安文学。主著 「平安時代文学の研究」「古代宮廷生活と女性」（岩波講座『日本文学史』第1巻所収）など。現住所 横浜市保土谷区西久保町110

こばやしひろくに

小林弘邦 昭和5年東京生。国学院大学大学院修士修了（昭31）。国学院大学図書館司書。専攻 中世戦記文学。現住所 東京都荒川区西尾久7-47-3

義経記 1 [全2巻]

東洋文庫 114

昭和43年5月10日 初版第1刷発行
昭和48年10月20日 初版第2刷発行

検 印

省 略

訳 者 佐 藤 謙 三
小 林 弘 邦

東京都千代田区四番町4番地

発 行 者 下 中 邦 彦

発行所

郵便番号 102 東京都千代田区四番町4番地
振替・東京29639 株式会社 平凡社

落丁・乱丁本はお
取替いたします

印刷 株式会社共立社印刷所
製本 株式会社石津製本所

© 株式会社 平凡社 1968

凡 例

一 本書の本文は流布本の一つ、その巻末に寛永十癸酉五月吉日西村又左衛門尉梓行とある平仮名整版本を用い、さし絵は、元祿十年丁丑孟春穀日京寺町松原下^ル町梅村三郎兵衛と巻末にある絵入りの平仮名整版本によった。

一 本書は、原文をできるだけ忠実に口訳することに心がけた。しかし、現代文としてその文意が通じないような場合などには、語句の順序を変えたり、主語や客語等を補ったりした箇所や、意訳したところもある。また、原本にはないが、異本にある本文を挿入した方が理解しやすいと思われる場合に限り、口訳した始めと終りの右側に印を付けて挿入した。* 印は田中本、△ 印は芳野本、○ 印は判官物語、□ 印は義経物語である。

なお現段階で解釈できない語句は原文のままとした。

一 和歌は原文のままとした。

一 義経に関する伝説を中心に、『義経記』を読む上で知っていた方がよいと思われる人物の略歴、系図、伝説、また官位や、諸記録との相違などを巻末に注として付けて読者の参考に供した。

一 原本の明らかに間違いと思われる人名・地名は、原文のままとし、() 内または注で正した。間違いと思われる語句についても同様である。

一 本書の口訳にあたって、岡見正雄校注『義経記』（日本古典文学大系）の恩恵を被った。また、高木卓訳『義経記曾我物語』（古典日本文学全集）を参考にした。

一 本書の目録は、漢字、仮名遣い、振り仮名等、すべて原文どおりとして、原本の形態を生かした。このため、目録の題と本文の題とが一致しないことがある。

なお、本書に取り上げた『義経記』の異本と、しばしば引用して参考にした本とを挙げて、簡単に解説を加えておく。

田中本義経記

高橋貞一編著の『田中本義経記と研究』の解説によると、この田中忠三郎氏蔵の義経記は、江戸初期の書写本で、諸本の脱誤をかなり多く補うことのできる貴重な伝本である。なお本口訳本に引用した義経物語（高木武氏旧蔵）は、高橋氏の解説によると田中本より後出と認められる同類本である。田中本は昭和四十年十一月、未刊国文資料刊行会から刊行されている。

橘本判官物語

稲垣本・稲武本といった、現橋健二氏の蔵本。巻七の題簽には「義経記」とあるが、内題はすべて「判官物語」と書いてあり、室町末期の書写本と言われている。昭和四十一年十月に古典研究会から複製本が刊行された。

芳野本義経記

山岸徳平博士は、永祿六年以前のもので、流布本中のある系列に属する一小異本と称すべきであると言われている。昭和四十年四月に静嘉堂文庫蔵のものが複製本として古典研究会から刊行された。

異本義経記

乾坤二冊で、叡山文庫に所蔵されている。いわゆる義経記系の諸本とは異なり、覚書き・個条書き風である。伝承文学研究第四、五号に志田元氏の翻刻したものがある。

平家物語

異本の数が非常に多い。一方流（例えば、岩波文庫や角川文庫の本）と八坂流（国民文庫本）の語り本に分かれており、また、長門本（二十巻）とか延慶本（六卷十二冊）などの読み本もある。なお、本書によく引用した屋代本平家物語は、八坂流の語り本中最も古態を持つ一本で、現存の本は巻第四・第九を除く巻第十二までと、剣巻及び抽書とから成っている。本書の複製本が春田宣氏の解説付きで刊行されている。

源平盛衰記

平家物語の異本の一つで、全四十八巻からなる。通俗日本全史（大正元年、早稲田大学出版部刊）

所収のものが活版本のうちではよいとされている。

吾妻鏡

東鑑とも書く。治承四（一一八〇）年四月九日から文永三（一二六六）年七月二十日までの鎌倉幕府の記録。ただ純粹の日記ではないので、史料価値は下がる。国史大系・国書刊行会叢書・日本古典全集並びに岩波文庫所収。

玉葉

玉海ともいう。長寛二（一一六四）年閏十月十七日から正治二（一二〇〇）年十二月二十九日まで
の九条兼実の日記。国書刊行会叢書所収（昭和四十一年にこの複製本がすみや書房から出版されて
いる）のものと、哲学書院刊（明治四十一年）のものがある。

吉記

吉御記・吉戸記・吉大記ともいう。仁安元年から二十八年間の吉田経房の日記。現存のものは仁安
元（一一六六）年から二年、承安二（一一七二）年から安元三（一一七七）年、治承三（一一七九）
年から文治元（一一八五）年と文治四年、建久二（一一九一）年である。史料大成所収。

百練抄

全十七卷。現存のものは、巻四の冷泉天皇の安和二（九六九）年から後深草天皇讓位の正元元（一二五九）年までの、編年体の記録で、京都側、公家方の事情に詳しい。作者未詳。国史大系所収。

左記

真言行法の故実書。口訳本に引用した一文は序文に当たる。群書類従所収。

愚管抄

全七卷。著者慈円の史論と言われる。国史大系、日本古典文学大系、岩波文庫所収。

保暦間記

全五卷。保元の乱から後醍醐天皇崩御の年までの、一八二年間における争乱を書いた、著者、成立年代不詳。群書類従所収。

尊卑分脈

十四卷。正しくは「編纂本朝尊卑分明図」という。洞院家で代々書き継がれた、皇室及び源平藤橘の諸系図。国史大系、故実叢書所収。

目 次

凡 例	一
卷第一	三
卷第二	五
卷第三	二五
卷第四	一七
解 說	二七

義
經
記
1

小 佐
林 藤
弘 謙
邦 三
訳

義経記 卷第一目録

よしとも都^{みやこ}おちの事

ときは都おちの事

牛^{うし}若^{わか}くらま入の事

しやうもん坊^{ぼう}の事

牛若^{ぎわく}きぶねまうでの事

吉次^{きちじ}が奥州^{おうしゅう}物がたりの事

しやなわう殿くらま出の事

義経記 卷第一

よしとも都落の事

我が国の昔から有名な武将を思い起こしてみると、坂上田村麻呂(注二)、藤原利仁(注一)、平将門(注三)、藤原純友(注四)、藤原保昌(注五)、源頼光(注六)などがいた。また、中国でも漢の時代、樊噲(注七)とか張良(注八)という勇名をはせた武将がいたが、しかし、それらは皆その名前だけは聞いているが実際にその勇姿を見たのではない。それに比べて、われわれの目の前で数々の武略を使いわけ、華々しい活躍を展開し、天下の人々を「あつ」と言わせたのは、下野守や左馬頭を歴任した源義朝(注九)の末ッ子、あの源九郎義経という日本にふたりといた名将であった。

その父義朝は、平治元(一一五九)年十二月二十七日、中納言衛門督藤原信頼(注十)に味方して、

京の戦さ^(注三)に敗れた。この戦さに先祖代々の家来達を数多く討たれてしまったので、義朝は生き残った二十騎ばかりで東国の方へ向かった。成人した子供達は引き連れて行つたが、幼い子供達は都に残したまま遁れて行つたのであった。

その時義朝と同行したのは、嫡男鎌倉の悪源太義平^(注二)、十六歳の次男中宮太夫進朝長^(注三)、十二歳の三男右兵衛佐頼朝^{うひょうそのかすけ}であつた。義朝は、悪源太義平に、北国の源氏武者を集めて攻め上れと言つて、越前国に向かわせた。だが、それも思い通りにならなかつたのか、義平が近江国の石山寺に潜伏しているのを平家方で聞きつけて、難波^{なんば}、妹尾^{せのお}などの平家の侍を遣わしてこれを捕えさせ、都に連れ上つて六条河原で首を刎ねた。

次男朝長は、敗走の途中山賊の放つた矢が左の膝がしらに深く突き刺り、美濃国の青墓という宿場まで来て死んだ。

義朝には、子供がそのほか方々にたくさんいた。尾張国の熱田神宮の大宮司の娘との間に生まれた子供^(注四)がひとりあつた。遠江国の蒲というところで成長したので、蒲の御曹司といつた。これは後に任官して三河守といわれた。

九条院^(注五)に雑仕として仕えていた常盤^{とぎわ}にも生ませた子供が三人あつた。今若七歳、乙若五歳、そして牛若はその年に生まれた子であつた。

平清盛^(注六)は、この子供達を捕えて斬り捨てるように敕命をくだした。

ときは都落の事

永暦元年正月十七日の明け方、常盤は、今若、乙若、牛若の三人を連れて、大和国宇陀郡の岸岡きしのおかという所に住む、親しく交際している人を頼って訪ねて行ったが、戦乱で、世の中が落ち着かない時節だからと拒絶されてしまった。仕方なく、その国のたいとうじという所に隠れていた。

常盤の母は関屋せきやという名で、京の都の楊梅町やまももに住んでいた。平家は、その関屋を六条（六波羅）へ呼び出して、常盤と三人の子供の行方を厳しく取り調べているという噂が常盤の耳にも入ってきたので、常盤はそれを非常に悲しんだ。母の命を助けようとすれば、三人の子供が斬られてしまう。子供を助けようとすれば、老いた母をきつと失うに違いない。子供のためにもどうして親を見捨てることができない。そうだ、親に孝行する者は堅牢地神けんろうちじんがその祈りをお聞き届けになってくださるというから、こうするのが子供のためにもよいのだと、自分の心に無理にも言い聞かせながら、三人の子供を連れて、泣きながら京都へ出かけて行った。

そのことが六条の耳に入ったので、早速あくしちびようえかげきよ悪七兵衛景清と堅物太郎けんもつとに命じて常盤母子を六条に引き立てた。平清盛は、常盤をひと目見て、それまで常盤のことを火焙りの刑にも水責めの刑にもしてやろうと思っていたが、激怒していたその心も今は急に解けてしまった。なにしろ常盤という女は日本一の美人だった。

九条院は、美人を非常に愛された人であつたので、ある時、京都中から姿や顔立ちの美しい女を千人集めさせ、その中から百人を選び、百人の中から十人を選び出し、さらにその十人の中からひとりを選出することがあつたが、その最後に残つた美人が常盤であつた。(注) 実際、あの美人として誉れの高い漢の武帝の李夫人や、唐の玄宗皇帝の寵妃楊貴妃でさえも、常盤の美しさには及ぶまいと思われた。

清盛は常盤の美貌に心を奪われ、自分にさえなびくならば、たとえ将来、この源氏の子供達が、自分の子孫のどんな敵にもなるならばなつてもよい、この三人の子供の命を助けてやろう、と思つた。そこで堅物太郎頼方と悪七兵衛景清に命じて、常盤母子を七条朱雀に住ませ、日々の護衛の武士も、頼方の一存に任せた。

清盛は、始終常盤のもとへ手紙を届けたけれども、常盤はそれを手に取つてみようと思しなかつた。しかしながら、手紙の数が度重なるにつれて、貞女は両夫にまみえずという通念からも外れ、また、世間の人の誹謗がその身に集まつてくることを考えないでもなかつたが、

ただ三人の子供の命を助けたい一念から、とうとう清盛の言葉に従って、愛してもいない人との新しい生活に入った。そうしたからこそ、常盤は三人の子供を各所で見事に成人させることができたのであった。

今若は八歳の春頃から観音寺に入れて修行させ、十八歳の時仏門に入る儀式を受けて、禪師の君と呼ばれた。後には、駿河国の富士の麓に住んで、悪禪師と呼ばれた。八条にいる乙若は、僧ではあったが、腹ぐるな恐ろしい人で、加茂神社、春日神社、伏見稻荷社、八坂神社の祭礼のたびごとに平家の人々をつけ狙った。後年、紀伊国の住人新宮十郎義盛が、以仁王の令旨を頂いて謀反を起こした時、東海道の墨俣河で討たれた。

牛若は、四歳になるまで母の膝もとにいたが、世間一般の子供達より、性質や行いが図抜けていたので、清盛もつねづね氣にして、

「敵の子を、その敵のところまで育てていては、将来どのようなことになるのであろうか」と言っていた。

常盤は、清盛のそういった考えを察したので、京都の東、山科やましなというところに、代々源氏に仕えていた者が、俗世間を通して隠れるようにして暮らしているその家に、七歳まで牛若を預けて育てさせた。